
マニキュア

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マニキュア

【Nコード】

N2806P

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

君が出て行った。

マニキュアの瓶だけ残して。

もう、何日くらい窓を開けていないだろう。

あの娘がこの部屋を出て行って、三度目の雨が昨日、降った。

薄らいでゆくあの娘の香りが、それでもまだ鼻の粘膜に残っている気がして、僕は窓を開けられないでいる。この部屋の、あの娘の残像まで風に吹かれて、どこかへ行ってしまいそう。

彼女は歯ブラシもキャミソールも、バスタオルも小さなバッグも、何も残さないで出て行ってしまった。立つ鳥後を濁さず。素晴らしい、ことわざを実践している、しているけれど、残された方は濁った水を眺めたい時だってあるのだ。

それが傷をえぐる事になろうとも。

僕は彼女がいなくなっただけで、恐ろしいほど色彩を失ってしまった部屋の中で、一番色を無くしてしまふくれている。いくら彼女の持ち物がなくなろうとも、想い出までにはなくならないので。

いつも髪を縛るためのゴムをひっかけていた水道の蛇口。

リモコンをいつも無くす僕のために、ぬいぐるみの両手両足を縫い付けて作ってくれたリモコン立て。

コップがないとうがいが出来ない彼女を、僕はいつも洗面所のドアを半開きにして、覗いては笑っていた。

彼女の記憶の亡霊は、僕を苦しめて、そして癒す。

そう、ひとつだけ、彼女の忘れ物がある。

きつと、わざと置いていったものだろうけれど。

薄紫の、ミルクを混ぜたような淡いマニキュアだ。

いつも水色のマニキュアしかしなかった彼女に、僕が一番最初にしたプレゼントだった。僕は紫色が大好きで、そしてその紫に爪先が染まった彼女の手で触れられたりしたら、幸せここに極まれり、そんな気分になると思ったから。

照れる彼女の手を取って、僕はその可愛い爪にマニキュアを

塗ってあげた事がある。たくさんはみ出して、結局笑いながら彼女は自分で塗り直したけれど、「ありがとう」って言って、そしてキスしてくれた。あの時の感触が、まだこの唇に残っている気がして、僕は切ない胸の痛みにつんのめる。

半分ほど残っているマニキュアの瓶を、僕は意味もなく倒す。

あの細い腕を思い出すと、泣けてくる。

どうして僕はあの手を放してしまったのだろうと。

僕が幸せにしたかった、あの細い腕。あの細い彼女。僕の、大好きだった人。

マニキュアの瓶は、ことん、と小さな音、ごくごく小さな音を立てて、テーブルの上に転がった。

これを買うのに、実は結構勇気が必要だった事を思い出す。化粧品売り場なんて普段何の用もない僕は、意識してしまうとどうしても恥ずかしくて、結局薬局の隅にある、化粧品コーナーで、必要もないティッシュやらトイレットペーパーやら、歯ブラシ、シャンプー、リンスなどに紛れ込ませて、やっと買ったのだ。アダルトビデオを借りる方が、まだ恥ずかしくないや、と赤面しながら。

彼女は初めての僕のプレゼントを喜んでくれたのに。毎日つけて欲しいから、というプレゼントなのに、彼女は勿体無いと言って、大事に大事に、大切な記念日や出かける日だけに、それを付けていた。

友達が次々と結婚していく環境にいて、静かに微笑みながらもじりじりと焦っていた彼女を、優柔不断で鈍感な僕は、どうして気付いてあげられなかったのだろう。

マニキュアの蓋を、きしきし音をさせて開けてみる。

とろりとした液体に、中のブラシが染まっている。僕は、それ自分の左の爪に塗ってみた。短く切り揃えた、僕の爪に、それはとても不自然で。それに気付かないフリをしながら、右の爪にも塗ってみる。左手は僕が思っていたよりもひどく不器用で、たくさんはみ出した。きちんと乾いていなかったのだろう、左手のマニキュア

が手のあちこちに付いてしまっている。

「……馬鹿みたいだ」

僕は笑って、汚く塗りたくられたマニキュアの手を見た。

彼女の爪を、今は何色が飾っているのだろうか。

「馬鹿みたい……」

泣きそうになるけれど、泣かない。僕は、その手で自分を抱きしめてみる。彼女の細い腕を思い出したくて。

彼女のいない部屋で。

彼女の残した、マニキュアだけが存在する部屋で。

除光液がないとこの色が落とせないのだと、不意に気付いた僕は、このままコンビニに行かなくては、と自分の手を見る。変な人だと思われるだろうか。思われるだろうな、この手のままレジで支払いをしたら。

僕ひとりが存在する部屋で、マニキュアの匂いがする。

それは彼女の匂いではないのに、彼女の唯一残した匂いなのだ。

僕はこの瓶の中の液体を飲み干してしまおうかと思い、その馬鹿げた考えに自分で笑う。飲んだら死んでしまうだろうか。胃が、紫に染まるだろうか。

彼女の残したマニキュア。

僕は未だに窓を開けられないこの部屋で、まだ彼女の事を思っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2806p/>

マニキュア

2010年12月4日04時32分発行